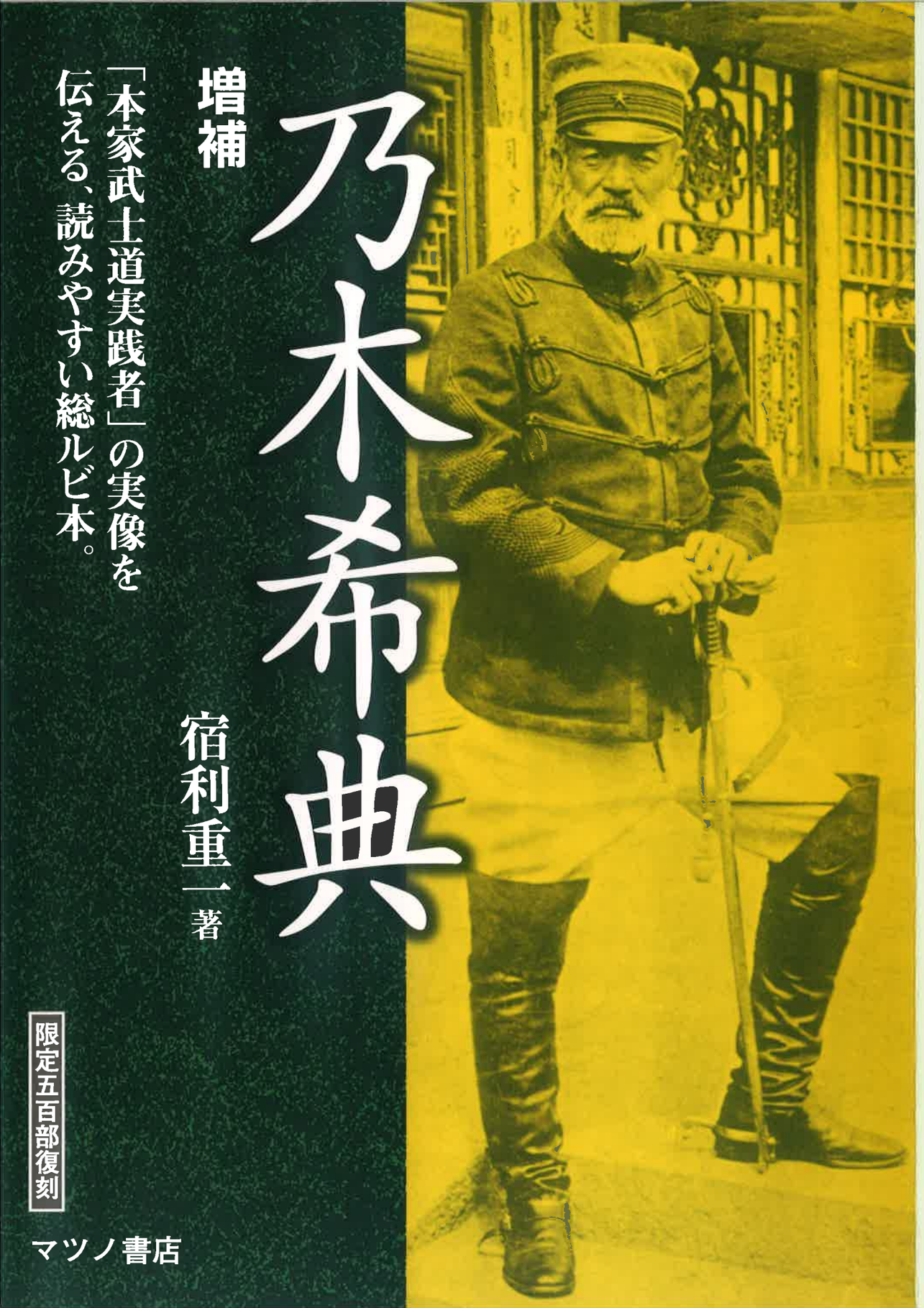

内容見本

のは、決して斬新であるとか、或は警拔であるとか云ふのではないが、千古に朽ちざる眞理であり、乃木少將のやうな人物に依つて記述せられた丈けに光輝があり、讀むものをして首肯せしむる。

この精采奕々たる大文章は乃木少將が寢食を忘れて努力すると共に、心眼を睜いて獨逸を見、獨逸の軍隊に於ける組織、精神を熟察し、その凝結せるものであるが、デュフェー大尉の指導の下に眼勉するのみでなく、兩少將は機會ある毎に、獨逸の名ある軍人に接し、その家庭に入つて交遊することを怠らなかつた。老いたる皇帝ウヰルヘルム一世にも屢々召され、謁見を賜はつたが、老將軍モルトケと會談する好き機會も與へられた。渺たる日本の兩少將ではあつたが、何處に於ても厚遇せられ、獨逸と獨逸人とを理會する便が多分に、そして自由に與へられたのである。

「川上は能く中央を調べ、乃木は具に地方を見て歸朝した」と云はれてをるが、乃木少將は文字通り獨逸の地方に遊び、人情と風俗とを鋭く研究、視察し、新日本の前途に資すべく懈怠しなかつた。最も率直と云へば、獨逸から歸つた以後の乃木少將は我が國民（と云ふのが妥當でないならば、軍人）に「斯くあるべし」と要望する前に、自ら範儔を示すことに精進したと見るべきである。自ら起草した大文章を乃木少將は具體化し、自分が其の標準、模範たるべく、強く決意したのであらう。意見書を反覆して讀めば、沁々とさう云ふやうに感銘せられる。否な、獨逸留學の報告書と看做すよりも、乃木氏の更生を語る告白、或は宣言と稽へることが妥當であるやうに考へられる。

■「大文章」とは、一年半に及ぶドイツ留学中の見聞を基に記された「意見書」のことです。本書ではその全文を、二十頁近くにもわたって掲げています。

内容見本

りや駈ッこをしても、それを靜かに無人さんは見てゐるのでした。體も無人さんは弟の眞人さんに比較して細く、優形でありましたが、聲も亦優しく、妹のイネさんが私共に遊びに御出でになつてゐると無人さんが迎へに御見えになつて「イネさん御飯ぞナ、御歸り」と申されてゐた樣子が今も眼先にちらつくやうであります。私も乃木さんに遊びにまゐつて小母さん――壽子――から日當の好い部屋で髪をあげていたゞいたことが屢々であり、乃木家の皆樣が私共の湯に御入りになるために、好く御出でになつたことを覺えてゐます。その頃は現在と違つて兩家の間に練塀がなく、杉の垣根があつて出入り出來るやうになつてをつたのですから。

と述べ、更に思出では縷々として盡きなかつたが、優しい無人であつても、別に弱虫とか、或は泣虫ではなかつたやうに記憶してをると云ふ。桂彌一氏述「集童場に關する懷舊談の大要」(二一三―二二五頁)中にも亦次のやうなことが記されてをる。

集童場では、折節犬や猫を殺すのである。今日の如く野犬撲殺人も居らず、野犬の群生は中々夥しく、包厨係は非常に困つてゐた。そこで罠をかけたり、色々の工夫をして、之を捕獲するので、捕獲したが最後、槍や刀で殺すのである。之を殺す刀槍は、半錆位のものが別にきめてあつた。殺すのは大部分、面白半分であるが、一は腕だめしでもあつた。又狐が行燈の油を甜りに來ることがある。これも二三回、やつたことがあつた。(中略)……先輩が乃木さんに向つて、無人さん(此の頃は普通、苗字は云はずに、名ばかり呼ん

■本書は、足で集めた聞書や独自に収集した多くの資料に基づいて書かれています。「乃木無人」は必ずしも巷説のように「乃木泣人」ではなかったようです。

内容見本

松下村塾の創立者を吉田松陰であると信じてをるものも亦少くないやうであるが、實際は其の父方の叔父になる玉木翁と母方の叔父の久保氏が相繼いで子弟を教育した處であり、寧ろ松陰は其の門下に學んだ一人である。然るに松陰が松下塾に講莚を開き、殊に安政四年に塾の增築成つてからは、愈々松陰を慕ふて入門するものが簇出した。而して松陰が松下塾で講義したのは、安政三年七月から五年十二月に至る二箇年半の歳月に過ぎず、その年の十一月二十九日には過激の罪で亦家に囚せられ、十二月五日には投獄せられてをるので、松陰と松下塾との關係は短かつたにかかはらず、その感化は深かつた。不朽であると云ふの不可ないであらう。

公爵伊藤博文は松陰の門下生であるが、松下村塾を「道德文章叙彝倫、精忠大節感明神、如今廟廊棟梁器、多是松門受教人」と咏じ、德富蘇峰氏は「松下村塾は、德川政府顚覆の卵を孵化したる保育場の一なり。維新改革の天火を燃したる聖壇の一なり。笑ふ勿れ、其の火、燐よりも微に、其の卵、豆より小なりしと。赤馬關の砲臺は粉にすべし、奇兵隊の名は滅す可し、然れども松下村塾に至つては、獨り當時に於ける偉大の結果のみならず、流風遺韵、今に迨で尙ほ人をして、欽仰、歎美の情禁ずる能はざらしむるものあり」『吉田松陰』(三一四頁)と高調してをる。その松陰は安政六年十月二十七日を以て刑死した。非命に倒れてしまつたが、その學問、文章、氣魄は朽ちぬ、永遠に遺されたのである。

■凡百の乃木希典伝は、彼の精神形成に多大な影響を及ぼした松下村塾とドイツ留学を無視していますが、本書はこの点にもよく注意し、しかるべき頁を割いています。

独自の資料による　乃木伝記の白眉

作家　山田兵庫

現在まで出版された防長人の伝記のうち、その点数が圧倒的に多いのが、吉田松陰と乃木希典であることは言うまでもない。

『乃木希典全集』下巻に収められた参考文献一覧を見ると、乃木伝記の出版が集中しているのは、大正の終わりから敗戦直前までの間である。出版事情が最悪だった昭和十年代だけでも、七十冊以上を数える。広く、熱心に読まれたのだろう。

その理由を、「軍国主義」の一言で片付けてしまうのは簡単だ。しかし、それだけではないものを私は感じている。

幕末に生まれた乃木希典は、真の武士道をたたき込まれて育った、最後の世代である。しかも乃木の場合は、あの吉田松陰に徹底したスパルタ教育を施した玉木文之進に師事したという筋金入りだ。

日本人は明治維新を境に、急速にヨーロッパナイズされ、合理的な頭脳を持つようになった。損か、得か、という物差しで、物事を判断するのが当たり前になった。

以前は美徳とされた、自らを律する武士的生き方は、合理的に見れば損な生き方に決まっている。だから、忘れ去られた。

しかし、人間というのは損得勘定だけで考え、動いていると、必ずどこかで歪みが生まれるものだ。

乃木と同世代の男たちが高齢化し、次々と鬼籍に入っていったのが、大正から昭和のはじめにかけてである。

この時期に、乃木伝記の出版が集中しているという事実。それは明治維新から半世紀を経た日本人が、何か大切なものを失いつつあることに気づき、焦っていた証しではないだろうか。

そんな時代だからこそ、乃木はスポットを浴びた。古武士さながらの乃木の生きざま、死にざまは、大正デモクラシーを謳歌して育った当時の若者たちにとっても、かえって新鮮なものに映ったに違いない。

それは平成のいま、アメリカ映画「ラストサムライ」を観て、「武士道」を知ったと感激し、涙を流す若者たちにも共通するものがある。政治も経済も、人の心までもがおかしくなってしまった現代日本には、古き良き時代の象徴とされた乃木に、再び注目が集まりやすい土壌が生まれているのは確かだ。

ただ願わくば、かつての「乃木発見」が、精神主義を煽るしかない軍部や政治家に都合よく利用され、日本を最悪の結末へと転がり落とした轍だけは踏んで欲しくないと思う。

利用されたがために、乃木という人物は戦後、歴史の上から抹殺されてしまい、いまだ復権を果たしたとは言い難い。それどころか戦前の反動から生まれた、アンチ乃木派も結構多い。乃木を愚将として描いた司馬遼太郎『殉死』も多くの支持を集めて来た。

しかし、日露戦争から一世紀を経たことでもあるし、そろそろ好き、嫌いといった感情論を越えた乃木評価が、本格化してもいいのではないか。

山口県史料の復刻にかけては、他の追随を許さないマツノ書店ですら、実はこれまで乃木伝記を一冊も出していない。それが今年、宿利重一『増補　乃木希典』を復刻する意義は大きい。十一年前、やはりマツノ書店は宿利の『児玉源太郎』を復刻した。『増補　乃木希典』は、その姉妹編ともいうべき作品である。

数ある乃木伝記の中で、宿利のものは白眉との評価が高い。著者が乃木という人物に深く傾倒しながらも、ジャーナリスト的な冷静な視点を忘れず、しかも独自に収集した多くの資料を駆使しているからだ。孫引きを積み重ねて完成させた伝記とは違い、すでにオリジナルとしての史料的価値も存在する。

宿利は大分県玖珠郡八幡村の出身で、関係者などからの、徹底した取材を基に著す軍人の伝記を得意とした。事故で両手の十指を失い、両手首をハンケチにくるみ、ペンを挟んで執筆したなどという逸話を聞くと、鬼気迫るものがある。

そうした執念は、著作にも反映する。たとえば、宿利の乃木伝記「第一弾」は、昭和四年に同県人である陸軍大将河合操（元第三軍参謀副長）の監修を得、発表した『乃木希典』である。

その後も新しい材料を求め、手を加え、昭和六年には『人間乃木』将軍篇を出し、さらにこの度復刻される『増補　乃木希典』へとつながる。自らの著作に対し、深い愛着、強烈な自信を抱いていたことがうかがえる。こうした作品こそ、復刻され、読み継がれるべきだろう。

増補 乃木希典 目次

自刃前の思出で
大凶報に接して
櫻田門外の默想
電話室を中心に
最後の決心成る
暗に系圖を示す
皇儲殿下に永訣
東宮御學問所も
豫感と靜子夫人
前夜に詩の鑑賞

年譜

希次と妻壽子
長府第一の人物
穎脱の稚齒時代
人間味は豐富に
試煉にも堪へて
子供に國境なし
貧乏のドン底に
再び春光は輝く
我子の家庭教育
内助者の典型は

玉木先生と御堀氏
香崖翁と熊野氏
試膽會の選手に
白軍司令として
憧憬の松下村塾
玉木文之進とは
心身健かに成育
雋秀の御堀耕助

陸軍少佐に任ず
明倫館に入學す
名を文藏と賜ふ
武人生活の展開
御堀に諭されて
巨人成長の途へ
京都退去の密議
烱眼の黑田清隆

歩兵第十四聯隊長
弟妹をも東京へ
新居は月賦建築
風鑑者は何處？
敵には同門の士
福原大佐の詰責
弟仆れ師自殺す
薩南の健兒起つ
野戰病院の珍客
父逝くの報にも

獨逸行
憂鬱の人として
靜子夫人を迎ふ
玄關に缺禮告示
熱望の歐羅巴へ
努力の一年有半
精采奕々の文字
更生の第一歩へ
乃木式生活とは
この人を正視す

臺灣總督
意外の話なるも
賢母の鑑として
不朽に輝く事蹟
潔癖の人として
悲しみも激勵に
山縣伯爵の慰諭

善通寺時代
平常の戰時生活
不時に巡視して
靜子夫人の訪問
元旦の午前三時
淡々水のやうに
雪中山巔の祝宴
自ら燒石を握る
温情の人として
灼熱せる責任感

旅順攻圍戰
御信任は無限に
勝典先づ戰死す
赤痢と軍司令官
惡戰し苦闘して
「一擧直屠旅順城」
主將の陣中日記
保典も亦陣歿す
更に日記を見よ
難攻不落の砦も
名畫を描くもの
柳樹房の日々は
敵前に暴露して

奉天戰—凱旋
更に北征の途へ
乾坤一擲の快戰
「死！」を必期して
武士道を如實に
法庫門ロマンス
記念の凱旋軍歌
熱涙裡に復命す

乃木肖像（高島北海画）
本文三一四頁参照

■昔から全国各地の古書店巡りをしてすぐわかるのは、乃木本と松陰本の多いことでした。長州関係の人物誌は他県に比べ圧倒的に多く、中でもその半分を、この二人の本が占めていました。

現在のネットショップもやはり似たような傾向ですが、宿利重一の著作はありません。

■復刻に際しては、B6判の原本を「内容見本」の通りA5判に拡大して格段読みやすくなりました。今ひとつの特色は、読み易い総ルビ本であることです。

■今回は大サービス価格でもあり、PR開始と同時販売なので、特価締切を待たず、必ず売り切れると思います。

■体　裁　A5判五百頁　上製貼箱入
■定　価　六千円（税込・〒四五〇円）
■特　価　五千円（　同　）
■特価締切　十六年十一月末（厳守）
▼二点セット特価もあります。
▼直販につき書店卸不可。

限定五百部復刻

周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二一九五
URL http://www.matuno.com
マツノ書店

推薦の辞

東京乃木神社宮司
中央乃木会顧問
高山　亨

本年は日露戦役開戦の年、明治三十七年より数えて丁度百年という節目に当たる。明治の精神が遠くなり、忘れられつつあるが故に、現今の日本の世情は、混迷の極に達していると云っても過言ではない。

そのような憂情を禁じ得ない時、今般『増補乃木希典』冬湖・宿利重一著が復刻されることは、欣快に堪えず、心よりの推薦の辞を述べたい。

乃木将軍伝は、戦前戦後を通じて「西洋のリンカーン・東洋の乃木」と称される程の多数にのぼると云われている。しかし乍ら、戦前の多くは、贔屓の引き倒し的な講談調、浪花節的創作話が多くみられ、反対に戦後本の多くは、戦前の日本は全て悪とする自虐的史観の風潮の中、否定的乃木像ばかりが氾濫している。それら多くの伝記本の中で、宿利本『乃木希典』は精緻な資料と、多くの乃木家親族、友人、知己の検証を通し、永年にわたり推敲を重ねた、伝記本としては最も信頼度の高いものであり、かつ著者は、心底乃木将軍に感激と尊敬の念を持っており、読む者をして心を振るわせる程の感動を与える内容がある。

昭和十二年本書が公刊された時、当時わが国で最高の発行部数をほこった報知新聞（後読売新聞と合併）に書評を書いた黒木勇吉氏（後読売新聞論説委員）は、「読んでゆくうちに、私は吸い込まれるように何度も落涙した。将軍はやっぱり鬼神ではなかった。夫人はやっぱり鉄石ではなかった。ただ、世間並の親子と少しも変わらぬ父であり、母であった。そのありふれた出発点から、堅忍、克己、努力によって、一歩一歩その人格の玉成に向かって、たゆまぬ一生を送ったところの修練の人であった。」と書き、「読みおわったのは、午前三時をすぎていた。もうすぐ夜も明ける。出社にまにあうよう〝書評〟を書きあげておこうと決めて、筆をとった。通読したありのままの感想を、書き綴ってゆくうちに、私はひとりでにポロポロと涙が落ちたのである。」と追懐している。

私も本書を再読し、所謂乃木三絶といわれる次詩

山川草木轉荒涼　十里風腥新戰場
征馬不前人不語　金州城外立斜陽

爾靈山險豈難攀　男子巧名期克艱
鐵血履山山形改　萬人齊仰爾靈山

皇師百萬征強虜　野戰攻城屍作山
愧我何顏看父老　凱歌今日幾人還

をみながらこの推薦文の詞を書いている。黒木晩石翁と全く同様の気持ちである。

乃木将軍の最晩年山陰から能登へ、乃木家先祖の墓参の為に旅をされたことがある。その折、和倉温泉に宿し、温泉女将の揮毫依頼に応えて、一献の酒杯を傾けた後、扇面に、「一滴　千金　男子　涙　多情　或有　似無情」と書かれた実に意味深長な書が乃木神社に残っている。前詩の「一将功成リテ萬骨枯ル」という自責の念にかられた心情と対をなすべき心持ちが拝察される。

現代の「私ありて公なし」の風潮の中、乃木将軍の「公ありて私なし」の心が、読む者の琴線に触れること間違いなしと信ずるものである。

特に、東京裁判史観の影響により、戦後学校教育は「暗黒の近現代史」となってしまっているが、本書を読む者、光輝ある明治の精神を感じ、乃木将軍の精神に感動し、出会いを経験することにより、わが国の将来に、おおいなる光を感じ、心に清風が起きるものと確信する。故に一人でも多くの人々に本書が読まれんことを念願し、推薦の辞とする。